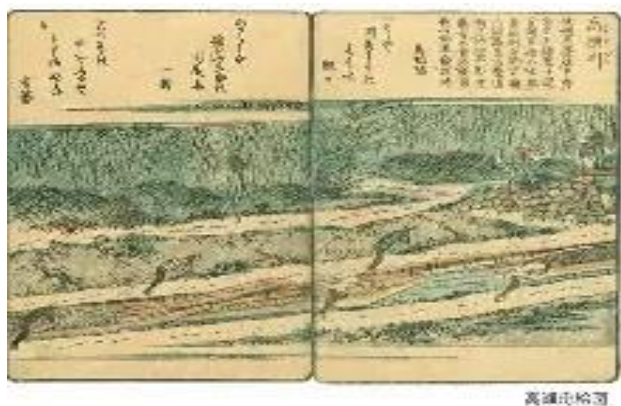


伏見の十石船

伏見は歴史的に見て、城下町・宿場町そして日本各地と京を結んだ「水運」として京の最大の内陸港として栄えました。遡ってみますと天下統一を果たした豊臣秀吉はその晩年に拠点となる城をつくろうと巨大な巨椋池から水路として宇治川を分離して、文禄3年（1594年）大規模な治水工事を行い伏見港を整備しました。京と大坂、そして全国各地をつなぐ港町として栄えていきました。さらに秀吉の死後、徳川家康は伏見を幕府直轄地とし、日本で初めての銀座（通用銀の鑄造所）が設けられ経済拠点としての役割も担いました。かくして伏見地区は全国各地の荷を乗せた船で賑わい、人と物資であふれる港町として発展していきます。さらに角倉了以が慶長19年（1614年）に「高瀬川」を開通させ伏見港は船が集中するようになり伏見は京都の南の玄関口としてさらに大きく発展致しました。明治に入り、鉄道など陸路の整備と共に伏見港はその長い役割に幕を下ろしました。かつて旅人を乗せて淀川を上下していた「十石船」「三十石船」が観光船として復活しています。現在では伏見の清酒（日本酒）処と共に観光名所として人気を博しています。



京・伏見の観光スポットとして人気の「十石舟」